



広島県立
やすふろいち
安古市高校

進路指導改革

組織的な進路指導で 生徒の志望を高め、 主体的な学びに導く

◎校訓は「仰高（心豊かな人生の創造を目指し高遠の理想を仰ぐ）。広島県から様々な事業指定を受けてきており、2000年度「学力向上重点校」、03年度「進学指導拠点校」、09年度「トップリーダーハイスクール」、15年度「探究コアスクール」に指定される。

設立	1975(昭和50)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約320人
2016年度入試合格実績(現浪計)	<p>国公立大は、北海道大、東北大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、広島大、九州大、県立広島大などに261人が合格。私立大は、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ531人が合格。</p>
住所	〒731-0152 広島県広島市安佐南区毘沙門台3-3-1
電話	082-879-4511
Web Site	http://www.yasufuruichi-h.hiroshima-c.ed.jp/

変革のステップ

<p>背景</p> <p>◎公立高校の学区が全県一区となり、成績上位層の生徒が他地域に流出。組織的な進路指導の構築が課題に</p> <p>STEP 1</p>	<p>実践</p> <p>◎志望校検討会の充実、難関大学志望者補習の実施、生徒の主体性をより重視した「総合的な学習の時間」への変革を推進</p> <p>STEP 2</p>	<p>成果</p> <p>◎組織的な進路指導の体制が整い、国公立大学合格実績がV字回復を果たした。2016年度入試は、過去最高に近い261人の合格者数を記録</p> <p>STEP 3</p>
--	---	---

進学実績回復に向け、
組織的な進路指導体制を構築

広島市北西部に位置する広島県立安古市高校は、例年200人以上の生徒が国公立大学に合格する、県を代表する進学校だ。しかし、かつては進学実績が低迷していた時期もあった。広島県では2006年度に公立高校の学区が撤廃され、同校の学区の成績上位層から広島市中心部の進学校を目指す者が現れ始めた。その影響もあり、国公立大学進学者数は徐々に減り、数年後には150人程度まで落ち込んだ。進路指導主事の濱井洋行先生は当時をこう振り返る。

「教師たちにも危機感がありました。伝統的に自主性を重んじる校風もあり、学校を挙げて改革に着手する機運はなかなか盛り上がりませんでした。また、進路指導や添削指導は、教師個々に任されている状況でした」

そうした中、09年度に県の「トップリーダーハイスクール」指定校になったこともあり、当時の奥田孝憲校長が「指定校にふさわしい教育と実績を目指すべき」と力説し、10年度に改革が始まった。

まず取り組んだのは、3年生における志望校検討のプロセスの見直しだ。学年団と進路指導部が連携して進路指導を行うこととし、進路検討会議の充実を図った。3年生は5・7・10・12・1月の5回（現在は3回）、全担任と教科

担任、進路指導部、管理職が集まり、生徒・保護者に提案する志望校群や教科学習のアドバイスの方向性を決める。そして、担任は、進路検討会議の情報に基づき、個別面談や三者面談に臨む。

「ここ数年、難関大学も視野に入れた進路指導のできる教師の育成が課題となつています。志望校検討のプロセス、模試データの使い方など、進路情報や分析スキルを共有し、学校全体の指導力向上を図っています」(濱井先生)



前田節子 まえだ・せつこ
 広島県立安古市高校
 教職歴29年。同校に赴任して6年目。主幹教諭。「日々生徒と誠実に向き合い、勇気ある挑戦を支援する」



濱井洋行 はまい・ひろゆき
 広島県立安古市高校
 教職歴29年。同校に赴任して12年目。進路指導主事。「生物の教員として、生命の大切さと神秘を生徒に伝えたい」



渡辺和恵 わたなべ・かずえ
 広島県立安古市高校
 教職歴31年。同校に赴任して4年目。進路指導部1学年主任。「謙虚な挑戦者として、生徒とともに成長し続ける」



平野洋造 ひらの・ようぞう
 広島県立安古市高校
 教職歴15年。同校に赴任して3年目。企画研修部。実践推進リーダー。「既成の概念にとらわれず、生徒のためにやることにチャレンジする」

ハイレベルな指導にも対応できる 実力を備えた教師集団を目指す

14年度には、主幹、進路指導主事、学年主任、各教科担当による「難関大学指導プロジェクト」を発足した。目的は、難関大学に合格できる受験学力だけでなく、学問・研究に対応する資質・能力を持つ生徒の育成を目指し、難関大学指導体制を確立することだ。難関大学も視野に入れたハイレベルな指導にも対応できる教師集団となれば、学問・研究につながる授業や指導が可能となり、その結果、生徒一人ひとりが、高みを目指して自分の力を伸ばそうと志を抱くことができる。そうした理念が根底にある。

それまでも様々な取り組みをしていたものの、学年間、担任と教科間、教科内などにおいて、系統的・体系的なものとして十分に機能していなかった。そこで、指導の道筋を「見える化」して「共有」するために、3年間を見通した「難関大学指導トータルプラン」(図)を作成した。具体的な取り組みは、他学年も含めた全教師による進路検討会議の実施、最難関大学志望者対象の個別指導担当者会議の実施、大学入試問題研究の充実などである。例えば、難関大学志望者を対象に、7月(または10月)と1月には、全教師で進路検討会議を行う。難関大学志望の5人程度を取り上げ、個別学力検査までの伸びを推測し、必要な指導について話し合う。それ

らを通して、生徒一人ひとりの、学問・研究に向かう力を伸ばすために、学校として、教科として、授業者として何をしていくのかを共有する。

また、生徒の進路意識の涵養にも力を入れる。同校の生徒は、入学時はほぼ全員が地元の大学を志望しているが、県外の難関国立大学へも自分の希望進路と結びつけるよう指導している。1年生から、自身のGTZ(*1)から2ランク上の大学を志望校に設定させるのもそのためだ。さらに補習では、1年生から東京大学や京都大学の過去問題にも取り組ませる。主幹教諭の前田節子先生はこう語る。

図 「難関大学指導トータルプラン」(抜粋)

時期	指導とポイント	内容	教科
4~5月			指導の経過観察
7~8月			情報提供
9月			進路検討会議
10月	難関大への適性判定①	・教科担当による難関大対応能力を有する生徒の発掘	難関補習スタート
12月	保護者への情報提供	・難関大に関する情報提供 ・難関補習の経過説明	指導の経過観察
1~2月		・難関大補習生徒への意識づけ	
3月	難関大への適性判定②	・指導の経緯と本人・保護者の考え方の把握 ・2年生担任への申し送り	情報提供
2年	4月	難関大候補生徒の現状共通理解	情報提供

指導とポイント、内容、教科、学年会、担任(進路指導)、留意点、行事予定(模試、懇談等)の項目別で、各時期の活動を示した。*学校資料を基に編集部で作成

*1 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標。「S1」~「D3」の15段階がある。

「東京大学や京都大学の問題でも、毎日の授業をしっかり受けていれば解けることを実感させています。授業の大切さを認識させるとともに、そうした問題にひるまずやり抜くことが、自分にも手が届くかもしれないという自信につながっています。指導する教師も問題研究に真剣に取り組み、学問・研究に対応する授業づくりの一助となっています」

生徒の努力を「教科面談」で学力向上につなげる

生徒が安易に志望を下げないよう、学習成果がなかなか表れない生徒を対象とした「教科面談」も行う。1・2年生でそれぞれ年1回、ベネッセの「スタディーサポート」の結果を基に、家庭学習習慣は身につけているが成績が伸びていない生徒を各教科20人程度選び、教科担当が面談。その相談内容、教師からのアドバイス、今後の抱負をまとめた内容を基に、担任とも面談を行う。1学年主任の渡辺和恵先生はこう語る。

「『定期考査の成績が上がった』『行き詰まりが打開できて学習に集中できるようになった』など、『教科面談』を機に学力を伸ばした生徒は少なくありません。今後は、一定の期間を空けて再度面談をして、生徒の学習がどう変容したのかを追跡したいと考えています」

教科担当が、生徒の予想外のつまづきに気づ

けることも、「教科面談」のメリットだ。英語科担当の平野洋造先生は次のように語る。

「一文を丸暗記して、文章構造を考えずに音読していた生徒や、リスニングをしても聴きっぱなしで復習しない生徒など、学習の目的を理解せずに取り組んでいる生徒が多いことが分かりました。学習の目的や意味をしっかり伝えることの大切さを実感しました」

「仰高ゼミ」で大学進学後に伸びる力を育む

生徒に高い志を持たせ、主体的な学びに向かわせるために、「総合的な学習の時間」で行うのが「仰高ゼミ」だ。同校は15年度から広島県「学びの変革パイロット校」(*2)の「探究コアカスール」に、13年度から「ユネスコスクール」(*3)に指定され、ESD(持続可能な開発のための教育)を率先して実践し、その内容を地域や世界に発信していくことが期待されている。15年度に赴任した船津久美校長の経営方針に基づき、「仰高ゼミ」ではESDの視点を軸に教科学習・進路指導と連携しながら、生徒の主体性をより重視した授業を展開している。

中でも特色ある取り組みは、1年生の「ストーリーディング」だ。これは、自分の考えを他者に伝える説明の仕方や、感動を他者と共有するための表現方法などを学ぶ活動で、国語と

連関させ、文学作品の音読と身体表現を融合したパフォーマンスをグループで作成・発表する。

まず、専門家のパフォーマンスを鑑賞した後、生徒はそれを参考に、詩をどのように読み、身体を動かすのかをグループで相談し、作者の意図、情景など詩の世界を声と身体で表現する。そして、各クラスから選ばれた2グループが学年全体の発表会で披露する。「発表を通じて、人に伝えるとはどういうことかを学んだ」「同じ詩でも、人によって考えたり感じたりする視点が違うことで興味が湧いた」など、表現に関する知識を身につけ、興味・関心を高める生徒が多いという。ほかに、「切り抜き新聞コンクール」(1年生)、「教育はアクティブ・ラーニングを進めるべきか」などのテーマで行うディベート(1・2年生)などといった活動を行う。

「大学合格が最終目標ではなく、社会に出て伸びていく人材を育てるのが私たちの使命です。社会の課題について考え、議論し表現する経験を通して、学力だけではない新たな時代を切り開く力を持たせて大学に送り出したいと考えています」(前田先生)

生徒主体で運営するパネルディスカッション

「仰高ゼミ」の集大成は、3年生で行うパネルディスカッションだ。これは、持続可能な社

*2 2015年度にスタートした広島県教育委員会の拠点事業。主体的な学びを創造するため、授業研究、横断的・総合的な学びについて研究する「探究コアカスール」(6校)、教科の授業研究や体験的な学びを促進する「活用コアカスール」(18校)を指定。

*3 ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校のこと。

会の実現に向けた課題を掘り起こし、背景や原因を調査、考察した上で、その解決を模索する活動だ。個人考察、グループでのディスカッションを経て、クラス単位で課題を設定し、11月に学年全体で発表・ディスカッションを行う。

各クラスを代表するパネリストがクラスターマについてプレゼンテーションした後、事前で作成した「基調提案」を基に3年生の生徒全員で討論する。16年度は「気候変動への対応」国レベルの不等の是正」をテーマとし、司会は生徒が務め、ゲスト識者のOBである弁護士や教育センターの指導主事にはコメンテーターに徹してもらった。

「6年前から取り組んできた活動を、徐々に生徒主体の運営に移行しています。たとえ意見が合わなかったり失敗したりしたことがあっても、生徒が活動を積み上げ、自分たちの手で討議を進めることに意義があると考えています。ディスカッションを通して、自分が将来どう社会とかかわり、どう社会貢献していくのかを一人ひとりが深めてくれたと思います」(渡辺先生)

全教科で、主体的な学びを促す授業づくりを進める

一連の改革の結果、国公立大学合格者数はこの5年間継続して200人を超え、16年度入試

では261人に達した。難関大学志望者も増え、大学卒業後の社会に出てからの自分を見通して進路を考える生徒も目立つようになった。

それを支えるのが、生徒の主体的な学びを促す授業づくりだ。現在、全県で取り組む広島版「学びの変革」アクション・プランに基づき、同校でも全教科の授業で深い学びのあるアクティブ・ラーニングを取り入れようとしている。

16年度秋の公開研究授業でも、国語、英語など4教科が「知識構成型ジグソー法」(*4)を取り入れた授業を行い、生徒の主体的、協働的な学びを目指した。「個人ではあまり説得力のないような浅い理解の解だったが、グループで話し合ったことで様々な意見が得られ、深い

理解をして納得解を書くことができた」「自分の資料をしっかり読み取って班員に伝えたいという責任感を持ってジグソー活動に取り組めた」と生徒の達成感、満足感も高かったという。

また、「仰高ゼミ」の取り組みとリンクさせた教科の授業もあった。様々な学びを結びつけて、活用させていく授業づくりを、今後も学校全体で研究していく。

「本校で学んだことに自信と誇りを持ち、答えのない問いに対して、他者と協働して最善解を考え抜き、持続可能な社会の構築に貢献できる人であってほしいと思います」(前田先生)

情熱 若手教師が語る、指導変革への

主体的な学びを 学校全体で実現する

実践推進リーダー 平野洋造

2016年度、私は企画研修部に配属されました。本校は現在、広島版「学びの変革」アクション・プランに基づいて、学校を挙げて授業改善に取り組んでいます。次期学習指導要領に先駆けて、教師が話す講義形式の授業から、生徒の主体的な学びを促すスタイルへと転換を図るのが目的です。各教科への周知や進捗状況の管理を行うのが、企画研修部での私の仕事です。まずは、教科主任会議に参加して、趣旨を説明してきました。夏季休業までに授業を通して生徒に身につけさせたい資質・能力を明文化し、2学期にはアクティブ・ラーニングを取り入れた研究授業を教科横断で行いました。次は、3学期までに、どの単元でどのような力を生徒につけさせるのかを具体化してもらう予定です。

先生方は授業改善に積極的で、校内への浸透はスムーズでした。難しかったのは、私自身が国や県の方針、アクティブ・ラーニングの意義について理解することでした。説明が表面的にならないよう、学習指導要領や専門書を熟読して理解に努めました。

アクティブ・ラーニングを取り入れた授業については、私自身、担当教科の英語の授業で手応えを感じています。生徒の活動を軸にすることで、生徒の表情が生き生きしてくるのは新たな発見でした。今後も授業力に磨きをかけて、生徒が自分の成長を実感できる授業づくりを進めていきたいと思っています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2010年10月号指導変革の軌跡「群馬県立前橋東高校」など
▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け

*4 ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上げらせる協同学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」の3つの活動から成る。